

瀬戸遺跡（京都大学瀬戸臨海実験所構内）の発掘調査－関係者説明会資料－

2020年8月28日（金）

遺跡名：瀬戸遺跡

所在地：和歌山県西牟婁郡白浜町459（京都大学瀬戸臨海実験所構内）

調査機関：京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門

調査期間：2020年8月17日～29日

調査面積：160㎡（3箇所合計）

【瀬戸遺跡の概要】

- ・田辺湾の南、紀伊水道に突き出た番所の崎のつけね、東西に細長い陸繋砂州上に立地。標高6～7m。縄文海進（ピークは7000年前）後に砂州が形成され、縄文中期以降、人の活動が認められる。
- ・1965年、実験所職員であった檜山嘉郎氏によって、縄文時代晩期の石棒が採集され、その直後に実施された調査で、縄文晩期～弥生時代の遺跡であることが判明する。
- ・1970年代後半から80年代前半にかけて、職員宿舎や研究棟新営にともなって、5次にわたる発掘調査がおこなわれた。縄文時代から奈良時代にいたる複合遺跡であることが明らかになる。

【過去の調査成果】

- ・縄文から弥生への過渡期に作られた独特の土器は「瀬戸タイプ」と呼ばれ、学術上、重要な資料となった。太平洋沿岸における弥生文化の伝播の状況を解明する重要な遺跡として注目される。
- ・縄文晩期の人骨検出。屈葬された20歳から40歳までの壮年女性。抜歯があり、標石の可能性のある石をとまっていた。当該期の貴重な人骨例である。
- ・古墳時代前期および奈良時代の製塩関係資料が発見された。古墳時代では「目良式」（めらしき）と呼ばれる薄手コップ形の製塩土器、奈良時代では厚手丸底の製塩土器が大量に出土した。奈良時代では、約30個の扁平な石を敷き詰めて塩作りをおこなった製塩炉も見つかっている。
- ・1982年度に検出された奈良時代の石敷き製塩炉は、実験所のご厚意により、樹脂で固定して水族館の東側の地点に移築復原をおこなった（現在、津波注意の看板のある前の場所）。

【今回の調査】

- ・研究棟の増築、浄化槽・オイルタンクの設置などともなう事前調査。約40年ぶりの本格調査。
- ・調査箇所が3箇所に分かれており、東側からA区（研究棟増築箇所）・B区（浄化槽設置箇所）・C区（オイルタンク設置箇所）と呼称する。
- ・A区：現地地表下50cm前後（標高6m前後）に褐色～暗褐色の砂層の堆積が、北へ向かってわずかに高まるように確認される。黒色砂質土のひろがる不定型な範囲が認められたが、遺物は伴わない。調査区全体では、こうした有色の砂層から縄文後期～晩期頃とみられる土器片数点が出土している。
- ・B区：現地地表下1m前後（標高5.5m前後）で、褐色の砂層の堆積が確認され、調査区の西半部を中心に縄文後期～弥生中期頃とみられる土器や石器が出土している。
- ・C区：現地地表下1m前後（標高5m前後）に黄白色の砂層が厚く堆積し、奈良～平安時代土師器を包含している。さらにそれ以下1m程度までに褐色・灰色の砂層が堆積し、縄文後期頃とみられる土器片の出土が確認される。



図1 調査区の位置



写真1 古墳時代の土器溜 1982年



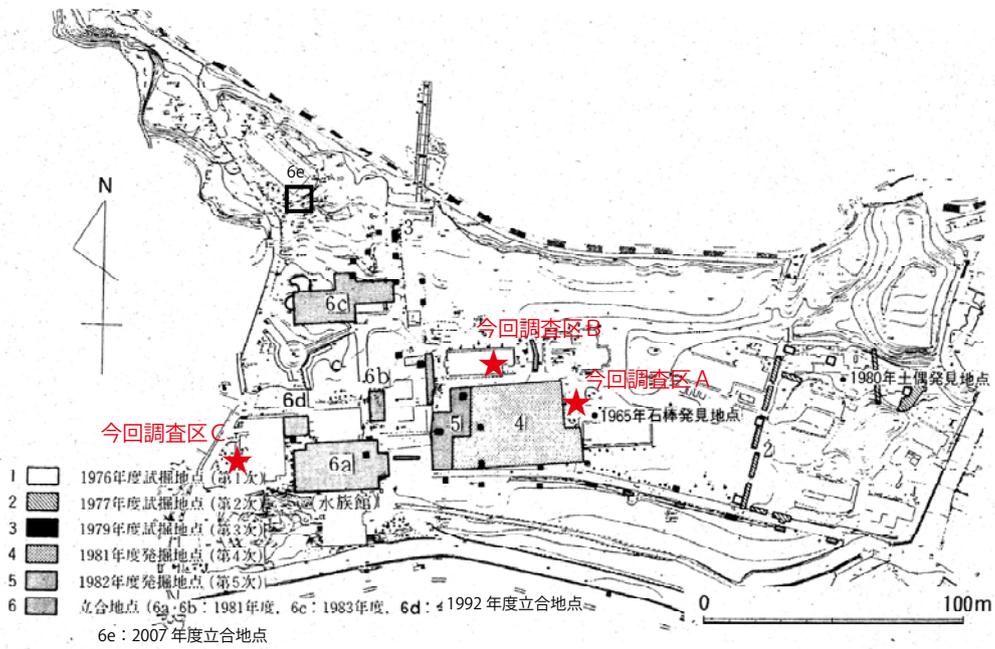
写真2 センター資料室(尊攘堂)に展示中の瀬戸遺跡から出土した遺物



写真3 石敷製塩炉の移築直後



写真4 石敷製塩炉の現況



これまでの調査地点と今回の調査地点



調査区A



東壁層位記録作成状況（南西から）

完掘状況（南から）

調査区B



表土除去後の全景（南西から）



西半部褐色砂層（縄文時代遺物の包含層）の掘り下げ状況（南西から・25日時点）

調査区C



表土除去後の全景（西から）



北半部下層確認状況（北から・25日時点）

謝 辞 今回の発掘調査にあたりましては、本学施設部のほか、瀬戸臨海実験所教職員の皆様ならびに白浜町教育委員会には大変お世話になりました。ここに記して、心からお礼申し上げます。